第25回日本再生医療学会総会 企業展示会場での特別企画

市民の医療リテラシー向上の取り組み ～再生医療の社会普及のために～　実施報告

日時　2026年3月19日(木) 13:00～14:30
会場　神戸国際展示場2号館1階 コンベンションホール内 特設ステージ
主催　株式会社VC Cell Therapy、アステラス製薬株式会社
後援　一般社団法人日本再生医療学会、一般社団法人再生医療イノベーションフォーラム

内容　座長： 八代 嘉美（藤田医科大学 教授）
イントロダクション　前田 忠郎（株式会社VC Cell Therapy 臨床開発ディレクター）
講演『多様なステークホルダーによる具体事例と取り組みにかける想い』
① 山田 千佳子（公益社団法人NEXT VISION 事務局長）
② 福士 納（アステラス製薬株式会社 アドボカシー部門長）
③ 同志社大学商学部 瓜生原研究室学生
④ Innovation for NEW HOPE学生アンバサダー
パネルディスカッション『マルチステークホルダーで進める市民の医療リテラシー向上 ー わたしたちだからできること』
パネリスト： 山田 千佳子　福士 納　瓜生原 葉子（同志社大学商学部 教授）
乗竹 亮治（特定非営利活動法人日本医療政策機構 代表理事・事務局長）（登壇者敬称略）

講演の様子

要旨　医療や健康に関する情報があふれる今、私たちは「正しい情報を知る」だけでなく、いざ自分や家族が病気になったときに何を信じ、誰に相談し、どう選ぶかという判断を迫られる。再生医療のような最先端の治療が社会に広がるためには、専門家だけでなく市民一人ひとりが、そのような情報を理解して使い、行動につなげる力（医療リテラシー）を育てることが欠かせない。本企画では、アカデミア、支援団体、学生、シンクタンク、企業といった多様な立場それぞれが、医療リテラシー向上のための具体的な取り組み事例を共有し、意見交換を行った。

医療リテラシー」とは？「向上」とは？

座長： 八代 嘉美（藤田医科大学 教授）

「医療リテラシー」とは「医療や健康に関する情報を入手し、理解し、活用する能力」と捉えている。本企画のタイトルを「～リテラシー向上」としたが、決して市民の医療リテラシーが低いと言っているわけではない。誰もが各々の生活や経験を通じて様々な医療や健康に関する情報を入手しているが、いざ本人や家族が病気になったときに、それらの情報を適切に使えているわけではないということを意味している。本企画が、いざというときの治療法の選択や生活設計につながる情報の「理解」から「活用」への道筋を、様々な立場の実践事例をもとに考える機会になればと思う。

八代 嘉美 さん

もやもやを育てることが　次の一歩

イントロダクション 「光をてらそう、もやもやから始めるリテラシーとアドボカシー」

前田 忠郎
（株式会社VC Cell Therapy 臨床開発ディレクター）

「リテラシー」や「アドボカシー」の営みは、「虹」に似ている。虹は、条件が揃って現れても、気付かなければ見えない。

本企画で様々な登壇者から「リテラシー」や「アドボカシー」の話を聞いて“もやもや”とするかもしれないが、結論を急がず、その“もやもや”を決して消さずに掘り下げて、育ててほしい。それが次の行動を生むはずである。

前田 忠郎 さん

講演
『多様なステークホルダーによる具体事例と取り組みにかける想い』

研究・医療・福祉のワンストップ拠点での挑戦

講演① 「情報障害者をゼロにするために挑戦を続ける活動体 NEXT VISION」

山田 千佳子（公益社団法人NEXT VISION 事務局長）

NEXT VISIONは「情報障害者をゼロにする」を目標に掲げる。ここでいう“障害”は、視覚障害そのものではなく、“必要な情報や支援にたどり着けないこと”。この課題解決のため、神戸アイセンター構想の下、研究・医療・ロービジョンケア（福祉）をワンストップでつなぐ拠点「Vision Park」を基盤に、人生を豊かにするための情報を提供し、見えない・見えにくい方

山田 千佳子 さん

だけでなく全ての方と共に学び、気づき、成長する空間を提供している。最近の実例では、大阪・関西万博でのナビタグ（二次元コード）実装がある。これは結果的に、視覚障害の有無にかかわらず、初めて訪れる観光客など多くの方々に役立ち、気づきの連鎖が生まれた。NEXT VISIONでは、相互の価値観を否定せず、一緒に楽しみながら考え、いつも学習者でいるという「平和な並話（へいわなへイワ）」のルール、神戸アイセンター公式キャラクター「テンボー」が示す「同じ方向、ビジョンを見ながら並んで話す」対話を推奨している。

科学の進化を患者さんの『価値』に変えるために

講演② 「わたしたちの市民向けアドボカシー活動 ～ヘルスケアの未来のために～」

福士 納（アステラス製薬株式会社アドボカシー部門長）

日本には、海外で使える新薬が使えない、開発すらされない「ドラッグ・ラグ／ドラッグ・ロス」という社会問題がある。科学の進化を患者さんの「価値」に変え、必要な医療を公平かつ迅速に持続的に受けられる社会を目指し、制度や規制をより良い形に進化させていくために、アステラスはアドボカシー活動に取り組んでいる。「医療のエコ活動」は、限りある医療資源を大切にする医療に優しい活動であり、市民向けのイベントや学校授業など、主に地域軸で市民の理解と応援の輪を広げている。また、再生医療など最先端治療の情報提供を行う「Innovation for NEW HOPE」プロジェクトでは専門家の支援のもと、市民向けセミナーや学生との協働プログラムを実施している。いずれの活動も個社では何もできず、対話を通じて信頼関係を築いた様々なステークホルダーとの共創なくしては語れない。今後もアドボカシー仲間の輪をさらに広げて、活動に邁進していきたい。

福士 納 さん

伝える相手だけでなく発信側にも起きた行動変容

講演③「バンク・トゥ・ザ・フューチャー～ソーシャルマーケティングに基づく骨髄バンク登録の促進～」

溝口 遼人　佐藤 翼聖　太田 夕貴
（同志社大学商学部 瓜生原研究室学生）

当研究室でソーシャルマーケティングを学んでいる私たちのチームの研究では、「骨髄バンク登録者を増やすことで救われる患者さんを増やす」ことを目的と設定し、献血ルーム来訪者を対象に、いくつかのアプローチの中から「他者貢献に興味を持つ人々にドナー登録という次なる一歩を踏み出してもらう」ことに焦点を当てた。献血ルームでのイベント「MATCH!! ～つながる輪～」では、骨髄移植のマッチングの難しさを体感するカードゲーム、学生が制作した患者さんの現状や骨髄バンクを学べる動画、ポスター展示等を組み合わせ、知識提供に加えて感情理解と自己関与を促したところ、ドナー登録に一定の成果を得ることができた。また、このような取り組みをもっと早く知りたかったという声も得られたことから、学校や民間の企業でも取り組みが広がれば、骨髄バンクについて考えるきっかけになると考える。さらに、研究前は骨髄バンクという言葉すら知らなかった私たち自身が、本研究により知識を持ち、多くの方とも出会い、そして骨髄バンクの説明員資格取得に至るなど、伝える側としても行動・態度変容が起きたことを自ら認識することができた。

溝口 遼人 さん

太田 夕貴 さん

佐藤 翼聖 さん

医療を自分ごと化に － 伝える相手に応じた工夫

講演④「学生が挑む！市民の疑問解決プロジェクト ～最先端の治療法が届く社会を目指して～」

可児 沙也伽　波田 朋希
（Innovation for NEW HOPE学生アンバサダー）

（前述アステラス製薬 福士さんから紹介された「Innovation for NEW HOPE」において）研究所見学や患者さんとの対話などの体験から得た学びをもとに、特定の対象に向けて伝えたいことを資材として制作し実際に発信するというプロジェクトに参加した。親子世代向けには、薬ができるまでの過程と医療課題をゲームと対話で学べるよう、大型のすごろくを制作した。実際にショッピングモールで出展した際、子どもたちが学び、さらに家庭に持ち帰って親子の対話が生まれるなどの効果があった。一方、大学生向けには、医療課題を知る機会がそもそも少ないので自分ごととして捉えてほしいと思い、同年代が共感できる生活習慣を「医療のエコ活動」と結び付けた講義・動画・クイズ・ディスカッションから成る資材を制作した。大学の養護教諭課程で授業を実施した際、受講学生から将来の職業に関する気

可児 沙也伽 さん

波田 朋希 さん

づきが得られたことから、単なる知識の獲得にとどまらず、各学生の行動変容や自分ごと化につなげることができたと実感した。今回の取り組みにより、自身が一般市民と医療との架け橋的な存在になれた、医療問題について知っている人を増やすことができたと感じた。また、正確な知識を持つ人が増えることで、関連する法整備や仕組みの迅速化の原動力にもなれると思った。

パネルディスカッション
『マルチステークホルダーで進める市民の医療リテラシー向上 ー わたしたちだからできること』

パネリスト：
山田 千佳子
福士 納
瓜生原 葉子（同志社大学商学部 教授）
乗竹 亮治（特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事・事務局長）

共感から行動へ - 社会を動かす“巻き込み”の実践
トピック① 講演の感想

瓜生原　講演で紹介されたいずれの取り組みも、情報の受け手が自分ごと化できるように発信の工夫がなされていることが印象的であった。また、そのプロセスを通して、発信している皆さん自身も態度・行動変容していた。それぞれの取り組みで、行動に結びつく設計が実現していると感じた。

瓜生原 葉子 さん

乗竹　最近のロケット打ち上げに対する世の中の好意的な姿勢を見る限り、ロケットのみならず医療も含むイノベーティブなものこそ、市民、特に学生の巻き込みが重要だと感じる。皆さんの講演を聞いて、そのような巻き込みがまさに実現していることを認識した。

誰もが医療に関して最適な判断ができるように
トピック② なぜ最先端の治療法の社会普及のために市民の医療リテラシー向上が必要か・重要か

山田　ロービジョン患者の家族として適切な情報を得ることができず遠回りした経験から、治療だけではなく生活の質を向上できる支援への早期アクセスが重要であることを知った。情報には正しいものも間違ったものあるが、医師、患者会、支援機関などの相談先も大いに活用して、治療や生活について自分にとっての最適な判断を自分でできるようになってほしい。

乗竹　医療提供者側・研究者側と患者当事者側・市民側で同じような話をしているようで、実際は全く違う話をしていることがよくある。医療側の客観的視点（view from nowhere）と当事者側の主観的視点（view from somewhere）のギャップを、双方が歩み寄って埋めていくことが第一歩だろう。

乗竹 亮治 さん

瓜生原　「行動科学」の観点で、人が行動を起こすという判断をする際は、①行動後のイメージを持てる、納得できる、②行動に対する「不安」を言語化し、不安を払拭するのに必要な知識を獲得できる、③周りの人（家族・社会）から肯定される、ことが前提である。その判断のために、情報量が多いことではなく、行動につながるような情報を双方向に伝え合うことが重要となる。

福士　市民の方々には、未来がどうあるべきか、ご自身で考えていただきたい。例えば、最先端の治療を受けるかどうか、そのメリットやリスクをしっかり理解して自身で判断してほしいし、そのためにも医療リテラシーは必要である。私たちは、製薬会社として、そのような治療に関する情報を正しく提供することが使命である。

パネルディスカッションパートの様子

情報を知るだけで終わらせない　さらに一歩先へ
トピック③ 活動や取り組みのさらなる発展のための今後の展望

瓜生原　「啓発」から「行動設計」への転換、すなわち理解を促すところから一歩行動を踏み出せる環境をつくることが重要である。実は、人は、理解して行動するだけではなく、「行動してはじめて理解が深まり、行動が連鎖する」存在でもある。また、人は、何か行動を起こすときに一人で決めるわけではない。他者との対話を通じて不安を言語化し、必要な情報を得たり、行動への納得感が生まれるので、周囲と対話ができる環境づくりも必要である。

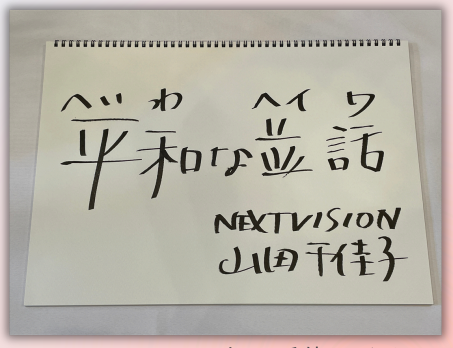
乗竹　私たちはシンクタンクとして、当事者一人ひとりの経験や声を可視化して社会の共通知へ変換し、政策提言につなげることができるはず。一事例として、皮膚疾患の国際的な患者団体GlobalSkinでは、患者さん当事者の生活上での悩み（痛み、インパクトなど）という視点での定量化・指標化に向け、患者さん、患者団体、医療従事者、企業が一丸となって取り組んだ。

山田　視覚障害そのものではなく、必要な情報がないことで、できないこと、困ることが生じることが真の障害である。それらを解決するために、どうしたらできるかという情報を得るための支援が私たちの仕事である。今後は、視覚障害にとどまらず、広いフィールドでの情報提供を推進していきたい。そのために、正しい情報だけを伝えるAIの開発を進めており、NEXT VISIONが様々な方たちのハブとなって、相談業務がより進化することを目指している。

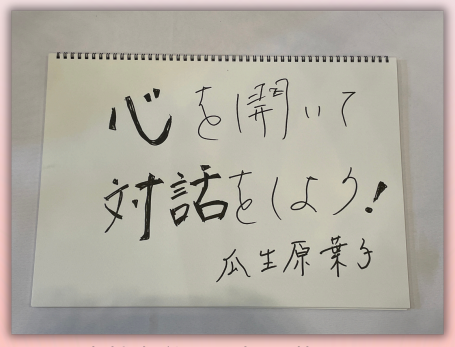
福士　医療リテラシー向上のためには、国民の皆さんの理解が必要だが、大きく分けて、①病に苦しむ患者さんとそのご家族、②様々な能力を持った専門家、③市民、という3つのグループに分けられる。相互に助け合い、それぞれの強みが発揮することで、医療リテラシーが向上し、再生医療のような最先端の治療法が持続的に届く社会になるはず。ただし、専門家が使う難解な用語はなかなか一般の方々には理解できないので、「サイエンスコミュニケーション」という手法の利用も推進できればと思う。

トピック④　皆さんへ伝えたいメッセージ

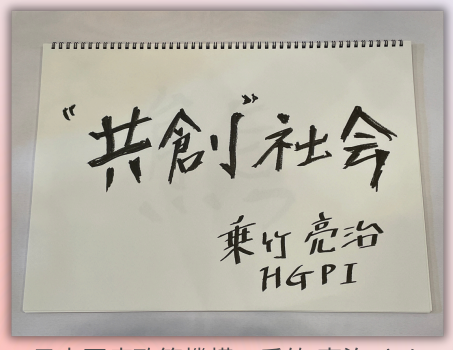
パネルディスカッションの最後に、6名の登壇者それぞれが、来場者へキーメッセージを送った。
座長の八代さんは、自身のメッセージを引用し、「最先端の治療法を含む医療の未来をつくるのは社会全体であり、患者さん、研究者、企業、行政という社会とともに、再生医療・細胞治療・遺伝子治療の時代をつくりたい」という意気込みを述べて、本企画を締めくくった。



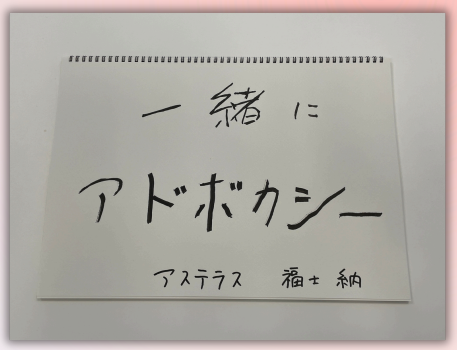
NEXT VISION　山田 千佳子 さん



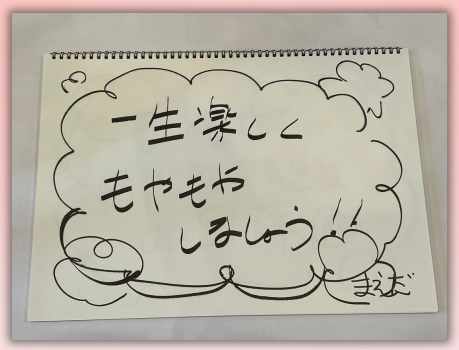
同志社大学　瓜生原 葉子 さん



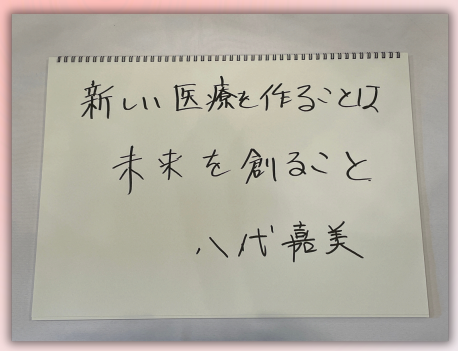
日本医療政策機構　乗竹 亮治 さん



アステラス製薬　福士 納 さん



VC Cell Therapy　前田 忠郎 さん



藤田医科大学　八代 嘉美 さん

登壇者の皆さん

＜参考＞
登壇者関連のウェブサイト

NEXT VISION

同志社大学
瓜生原研究室
「超エコ活動」

Innovation for
NEW HOPE

本企画の動画は二次元コードからご覧ください。
（ダイジェストおよびフルバージョンの2種）

講演資料（一部）は企画紹介ページをご参照ください。

ご質問・ご意見・ご要望は newhope-sm@astellas.com まで

ダイジェスト
動画 (約6分)

フル動画
(約90分)

企画紹介
ページ

問い合わせ
メール

CELL THERAPY

astellas

2026年5月 作成
アステラス製薬株式会社 アドボカシー部